

# 薬史レター

日本薬史学会

J S H P



第73号

2015年3月

## 日本薬史学会2015年度の主要行事のご案内

編集委員会委員長 西川 隆

2015年2月9日の常任理事会で、本学会の2015年度の総会関連および柴田フォーラムの日程が決まりましたのでお知らせします。すでに決定しております2015年会（奈良）を加え主要行事の日程などのご案内します。年会の詳細については続報でお知らせします。

### ●総会関連

開催日：2015年4月18日（土）12:00より受付開始

会場：東京大学薬学系総合研究棟

- 1) 12:30～13:30 理事・評議員会（10階大会議室）
- 2) 14:00～15:20 総会（2階講堂）
- 3) 15:30～17:40 公開講演会（同上）  
15:30～16:30 日本薬科大学教授 新井一郎「日本の漢方製剤産業の歴史」  
16:40～17:40 京都薬科大学名誉教授 桜井 弘「日本の無機系医薬品の歴史」
- 4) 18:00～ 懇親会（東京大学・山上会館） 会費4,000円

### ●第8回柴田フォーラム

開催日：2015年8月1日（土）

会場：昭和大学旗の台キャンパス4号館2階201号室

### ●2015年会（年会長：村岡 修・近畿大学副学長）

開催日：2015年11月21日（土）～22日（日）

会場：奈良県新公会堂

## 薬史学会創立60周年募金にご協力を！

発起人代表・日本薬史学会会長 津谷喜一郎

2015年9月末まで「日本薬史学会創立60周年記念募金」を行っています。趣意書や振込用紙などはすでに郵送させて戴きましたので、会員の皆様のご協力を心からお願いいたします。すでに多くの会員の皆様からご高志を賜りお礼申し上げます。

# 日本薬史学会第8回柴田フォーラム開催ご案内

柴田フォーラム委員長 相見 則郎

下記により日本薬史学会第8回柴田フォーラムを開催いたします。会員以外の方もお誘いの上、奮ってご参加ください。

日 時：2015年8月1日（土）

会 場：昭和大学旗の台キャンパス4号館  
2階201号室  
東京都品川区旗の台1丁目5番8号  
東急池上線・大井町線 旗の台駅下車  
(東口)徒歩7分

参加会費：無料

懇親会費：3,000円(当日お支払い頂きます)

## プログラム

13:30 受付開始

14:00～15:20

座長 指田 豊(東京薬科大学名誉教授)

(1)「珈琲一杯の薬理学－コーヒーは初めから薬だった－」

岡 希太郎(東京薬科大学名誉教授)

休 憩 15:20～15:30

15:30～16:50

座長 津谷喜一郎(日本薬史学会会長)

(2)「薬史学による語史－薬味・カヤクと料理－」

真柳 誠(茨城大学人文学部教授)

17:00～18:30

懇親会

会 場：大学食堂(講演会場近接)

## 参加申込・連絡先

〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1

東京大学大学院薬学系研究科附属薬用植物園

折原 裕

TEL&FAX：03-5841-4758

E-Mail：oriharay@mol.f.u-tokyo.ac.jp

## 申込締切

会場設営の関係上2015年7月24日(金)までにお申し込みください。

## 会場へのアクセス

会場および周辺地図は下記案内図またはURLをご覧ください

[http://www.showa-u.ac.jp/about\\_us/campus/hatanodai.html](http://www.showa-u.ac.jp/about_us/campus/hatanodai.html)

## 昭和大学4号館 会場案内図

東急線旗の台駅東口を出て昭和大学病院方面へ進みます。



# 日本薬史学会2014年会(福岡)開催報告

編集委員 小清水 敏昌

日本薬史学会2014年会在11月22日(土)午前10時から九州大学医学部百年講堂で開かれた。大会長の九州大学大学院 医学研究院 臨床薬理学分野の笹栗俊之教授が「本学会創立60周年の年に開催させていただき大変名誉である。特別講演2題と一般演題14題が発表される。明日の「薬史ツアー」にも是非参加を」と挨拶した。以下の一般講演と特別講演が行われた。

## 演題1. 米国における薬剤師職能の変化：赤木佳寿子 (一橋大学院 社会学研究科)

日本の薬剤師職能の発展のために米国での薬剤師業務を取り上げ、日本で生じている職能の変化は米国でも先行して起きていた。その変化を検討すれば、これからの日本の薬剤師のあるべき姿が見えるのではないかと考察した。

## 演題2. 大分県医学校病院(明治12-22年)薬局長五十川徹夫に関するメモ：五位野政彦 (東京海道病院 薬剤科)

明治初期の大分県医学校で活躍した薬局長五十川徹夫の経歴や生涯について発表した。

以上2演題の座長は大戸茂弘先生(九州大学大学院薬学研究院)。

## 演題3. 石見銀山鼠取り]考察：成田研一 (島根県薬剤師会 江津・巴智)

「石見銀山」は「いはみぎんざん」という「ねずみとり」「ねこいらす」の代名詞で、成分は亜ヒ酸(三酸化ヒ素)。現在も薬局方に収載されている。奈良、宮崎でも使われていた。

## 演題4. 創業時の「たなべや振出薬」と「黒川大和太掾藤原金永」：新開利治(日本薬史学)

初代田邊屋五兵衛が製造した「たなべや振出薬」は打撲、疼痛、血脱、産後血うんなどの効能があり、江戸時代に汎用されていた。その歴史や由来、命名の経緯など説明した。

以上2演題の座長は田中宏幸先生(九州大学大学院 薬用資源制御学)。

## 演題5. 歴史的病院の諸相：石田純郎 (岡山大学医学部 医史学)

世界の有名病院について創設の歴史や現状など

を発表。特にヨーロッパの病院を中心に取り上げ解説した。修道院から医療が始まったことなど。

## 演題6. 備中・備前での医薬に関する歴史：五味田裕 (岡山大学病院名誉教授・客員研究員)

岡山に関する医学や薬学創始者の業績について発表。特に県内南北の3河川を辿って、その地域の研究者たちの足跡に触れた。「適塾」の緒方洪庵は備中出身。

以上2演題の座長は柳田俊彦先生(宮崎大学 看護学部)。

## 演題7. キニホフ「植物印葉図譜」の写本：

河村典久(中京大学 人工知能高等研究所)

植物を写真の如く写し取る技術が江戸時代後半にわが国で興った。ドイツで出版のキニホフによる『植物印葉図譜』が長崎から入ってきて、尾張の本草学集団「尾張嘗百社」で研究された由。スライドで綺麗な植物拓(印葉図)が紹介された。

## 演題8. 医薬品の一般名に関する考察：(3)酵素に作用する薬物の名称：三澤美和(日本薬科大学)

一般名称の語源を研究している演者ならではのテーマ。今回は酵素に作用する薬物の名称を取り上げ考察した。命名の過程を検討すると各酵素に関連する薬理学的な作用機序からstemが作成される場合が多いようだ指摘した。

以上2演題の座長は山本都男先生(前九州保健福祉大学薬学部)。

## 演題9. 明治中期札幌の売薬広告―「北海道毎日新聞」明治28年新年号より：本間克明(ファーマホールディング)

明治初期の北海道で発刊された各新聞をもとに広告掲載の状況などを調査。このうち「北海道毎

日新聞」を基に当時の売薬の具体的な広告を示して述べた。

**演題 10. 明治前期における国産人参の輸出とその生産体制：童 徳言(九州大学 東洋史学研究室)**

人参は貴重品で幕藩の頃から統制されていた。明治5年に栽培・加工製造・出荷は民営化され個別農家式と会社式とによって経営された。明治政府の後押しで会社形式が力を持つようになり、輸出も急増した。その関連について発表した。

以上2演題の座長は宮路天平先生(東京大学大学院医学系研究科)。

**演題 11. 日向薬事始め(その17)-日向における種痘の歴史一再考(V)-若山健海著、嘉永西載「種痘人名録」について(2)-山本郁男(前九州保健福祉大学薬学部)**

現在の宮崎県内での種痘に関して永く研究している演者らは、当時種痘を受けた人名録を基に接種者の地域、痘苗の植え継ぎ状況などの調査結果を発表した。

**演題 12. Cannabinoid-based medicine の歴史と本邦における規制について：宮路天平(東京大学大学院医学系研究科)**

大麻は規制があって、なかなか研究面では難しい。海外では大麻から抽出される Cannabinoid を基にした医薬品が創薬されて、その臨床試験も30件以上実施され有用性が示されているという。

以上2演題の座長は本間克明先生((株)ファーマホールディング)。

**演題 13. 江戸初期における蒸留器について：ヴォルフガング・ミヒェル(九州大学名誉教授)**

江戸時代に幕府奨励でオランダから取寄せた大型蒸留装置で、各種和漢薬から薬油を抽出した。この蒸留装置の小型のものを「ランビキ」と称し、医者も用いて薬油で治療していたという。中国産や朝鮮産の蒸留器などからその歴史面を考察した。

**演題 14. 内藤記念くすり博物館所蔵の中国・大明正徳年製の銘がある薬研の蛍光 X線元素分析：奥田 潤(名城大学名誉教授)**

演者のライフワーク「薬研」について、今回は標

題の博物館所蔵のものを調査分析した。この薬研は青色で下部に魚などが描かれ、Co、Mn、Feが検出された。図柄からすると作製年代は500年前の清の時代ではないかと考察した。

以上2演題の座長は三澤美和先生(日本薬科大学)。

**特別講演 1. ボタニカルアートから見た薬の歴史：正山征洋(長崎国際大学 薬学部)**

座長：森本聡(九州大学大学院 薬学研究院)

美しい植物の図を示し治療に用いられる様々な医薬品の創薬について薬用植物を専門とする立場から解説した。中世ヨーロッパでは世界各地から送られた新しい植物の研究が行われ、それらをまとめた書物もあった。アヘンからモルヒネを抽出したのはドイツの薬剤師であり、キニーネはフランスの薬剤師が単離した。

**特別講演 2. 北部九州出身の二人の医学者：賀来飛霞(本草学)と林洞海(薬理学)：佐藤 裕(国東市民病院 病院事業管理者)**

座長：笹栗俊之(九州大学大学院 医学研究院)

島原藩出身の賀来飛霞は医家の次男として生まれ、医学と本草学を学び幕末の三大本草家と数えられた。その生涯と実績について解説した。明治11年小石川植物園取調掛に就任した。林洞海は小倉藩出身。江戸で蘭方医学を学び、和田泰然(後に佐藤泰然一順天堂の創始者)の蘭方塾でオランダ薬学書を訳した。本書は科学的に記述されていたので我が国における西洋薬物学に貢献した。

◇ ◇ ◇

また、翌日の貸切りバスでの「薬史学ツアー」は、笹栗会長をはじめ13名が参加して久光製薬の「中富記念くすり博物館」を見学。さらに古代文化で有名な「吉野ヶ里歴史公園」に足を延ばし、秋晴れのスキの穂が揺れる広大な公園を散策してバスは一路福岡空港へ。親交も深まり楽しいツアーになりました。学会企画・運営に尽力された笹栗俊之教授と吉原達也先生に深謝いたします。



## 六史学会 (2014年)参加記

日本薬史学会理事 五位野 政彦

恒例の六史学会が2014年12月13日(土)午後1時から順天堂大学センチュリータワー16階北で行なわれた。

演題と内容は次のようなものでした。

13:00 鈴木浩一郎(歯)「東京医科歯科大学創立者島峯徹によるアイヌ人の口腔内調査について」:人類学の視野を持つ歯科医学者島峯徹による北海道でのフィールドワークについて発表した。

13:35 日下修一(看護)「日本で最初に雇用された女性看病人について」:戊辰戦争中の1868年に壬生城内に女性看護婦が存在していたと報告した。

14:10 加藤僖重(洋)「宇田川榕菴の写生植物図譜と植物標本」:杏雨書屋(武田科学振興財団)から刊行された768頁の大書について解説した。

15:15 真柳 誠(医)「中国医経の新研究」:「黄帝医籍」とは演者の提唱した言葉で、素問など関連

した6文献の変遷について発表した。

15:50 ジュリア・ヨング(薬)「日本のワクチン産業史の新時代なのか: Hib ワクチンの日本承認をめぐる」: 別稿をお読みください。

16:25 平山紀夫(獣)「動物用ワクチンの歴史」: 狂犬病ワクチンを中心に、歴史と現状を述べた。

講演後、同館17階の「日本医学教育歴史館」を見学しました。2014年4月開館したものであるが、わが国近代医学と教育を俯瞰するその内容は天皇皇后両陛下の御来館を賜ったほどのものである。

懇親会は18:00から順天堂医院レストランヒルトップで行われました。

六史学会は、ほかの医療職の歴史を自分の視点とは違う位置から見ることができ、今後も参加者とともに医療の歴史を研究していきたいものである。

### 「日本のワクチン産業史の新時代なのか? Hib ワクチンの日本承認をめぐる」

ジュリア・ヨング(日本薬史学会理事・法政大学教授)

この数年間、感染症の大流行(はしか、2007年)をはじめ、ワクチンの供給不足(新型インフルエンザワクチン、2008年)やワクチンによる副反応問題(子宮頸癌予防ワクチン)によって、健康機関、医師、マスメディアに加えて一般市民の間においてもワクチンに対する意識が高まってきた。しかし、ワクチンそのものは、決して新しい薬(生物学製剤)ではなく、ワクチン産業も19世紀にドイツやフランスで発展した。日本にはドイツ留学した北里柴三郎がパスツールやコッホ研究所で使用した仕組み(ビジネス・モデル)を導入して定着させた。

1950年代は、ポリオ・ワクチンの発明で世界のワクチン産業は黄金時代を迎えた。しかし1970年代以降に発生した副反応問題がワクチンとワクチン産業に暗い影を落とした。この状況により1980年



代以降は欧米のワクチン製造業者の撤退やメーカー同士の吸収合併が相次ぎ、巨大なグローバル・ワクチン会社5社が誕生した。こうした欧米ワクチン産業の再編成に伴って技術面とマーケティング面で重要なイノベーションが起きた。それは新型の混合ワクチンの開発であり、とくに1990年代以降、新し

い混合ワクチンが次々に開発された。複数のワクチンを混合することで、多くの感染症を予防できるので、欧米各国の健康機関から賞賛を受け、現在は混合ワクチンがワクチン接種の主流になった。

このように欧米のワクチン産業では多くの変化が見られたが、同時期、日本のワクチン産業にはそれほど大きな変化が見られなかった。

こうしたワクチン産業の推移のなかで、報告の前

半ではフランスと日本のワクチン産業、とくに変化が激しい1980年代以降の歴史を比較対象にした。後半では「ActHib」(ヘモフィルス・インフルエンザ菌 b型ワクチン)の日本承認(2007年)の開発過程を取り上げた。そして外国由来のワクチン承認や上記した感染症問題などが産業と行政に大きな影響を与え、その変化によって日本のワクチン産業は新時代を迎えたと考えている。

## 中部支部だより

# 日本薬史学会・中部支部例会報告

日本薬史学会中部支部長 河村 典久

中部支部例会を以下の要領で開催した。

日時：2014年12月6日(日) 16:00～18:00

場所：名城大学名駅サテライト・多目的室

開会あいさつ 16:00

中部支部長 河村 典久

講演会 16:10～

演題1：「尾張本草学と『嘗百社』」

○河村典久(中京大学 人工知能高等研究所  
元金城学院大学)

演題2：「『宋板傷寒論』の権衡の検討」

○牧野利明(名古屋市立大学大学院薬学研究科  
生薬学分野)

笛木 司(マツヤ薬局)

松岡尚則(東邦大学総合診療・急病講座)

各講演の演題と要旨を以下に掲載した。

演題1：「尾張本草学と『嘗百社』」

○河村典久(中京大学 人工知能高等研究所  
元金城学院大学)

### 【要旨】

江戸時代の我が国の本草学研究団体としては関東の『楮鞭会』で、参勤交代で江戸に詰める大名で、本草好きの大名が富山藩主前田利保を中心に福岡藩主黒田斉清、旗本の馬場大助らが幕臣大田大州を先生格に集り、関根雲停を画家として本草会を作った。

関西では京都の『山本読書会』で、儒医の手で本草学塾や、大阪では豪商の手で運営された。

一方中部の尾張では『嘗百社』で、尾張藩から禄を受ける藩士あるいは藩医が中心となり、大名は参加せず、町人や農家もほとんど見られない。1780年頃小野蘭山の門下の結集があって、1827年に伊藤圭介が自宅修養堂に諸物品を陳列してほぼ毎年研究会を開いた。水谷豊文を主として『嘗百社』を結成次いで伊藤圭介が主導者となった。嘗百社の名称は伊藤圭介の兄・大河内存真による。

幕末・明治の尾張本草学のその後は、安政5(1858)年、伊勢菰野山にて採薬、安政6(1859)年、吉田雀巢庵が死亡や、文久元(1861)年、伊藤圭介が江戸へ移り、明治維新後、医学館・薬園は廃館・廃園となったあと、石田濟庵、戸田寿昌らが中心となったが目立った活動はしなかった。明治15年5月三重県北勢地方で圭介門下・丹波修治が『交友社』を結成した。その後、尾張嘗百社と合併して『嘗百交友社』を結成したが、明治35年の第31回まで継続し自然消滅した。

尾張嘗百社の得意技術として植物の形を写す『印葉図』がある。これは植物に墨をつけ、植物の形を紙に写し取る方法で、江戸後期にキニホフ『植物印葉図譜』がわが国へもたらされた。伊藤圭介、水谷豊文、大窪昌章、丹波修治らにより、盛んに行われた。現在その原本の所在は不明であるが、キニホフ

の図譜の写本が6点残されており、その全容を調査して原本を推理した。

## 演題2：『宋板傷寒論』の権衡の検討

○牧野利明(名古屋市立大学大学院薬学研究所生薬学分野)

笛木 司(マツヤ薬局)

松岡尚則(東邦大学総合診療・急病講座)

### 【要旨】

『傷寒論』の薬用量は往古から問題とされており、『宋板傷寒論』の1両を現在の何gに換算すべきか、未だ定説が得られていない。江戸時代の狩谷掖斎は『漢書』の権衡(1両=約14g、「常秤」)で秤量した『宋板傷寒論』収載処方、煎方指定の水量では煎じられないという根拠から「常秤」を否定、「神農之秤」(「常秤」の1/10量)を用いるべきことを主張し、これが現代の漢方薬の処方量の基準となっている。

我々は煎じあがりに生薬カスが吸着している水量に着目して検討を行い、『宋板傷寒論』に「常秤」を適用しても煎じ可能なことを実証した。さらに、『傷寒論』成立時代の権衡の考証を目的に、敦煌本『本草経集注』「序録」の「1方寸匕に等しい容積の薬升」の記述に着目、同記述が『漢書』「律暦志」に従っていることを仮定して計算を行い、1方寸匕の容量として5.1cm<sup>3</sup>の値を得た。これを生薬の実測数値を用いて検証し、仮定を肯定する結果を得た。この容量から換算した1合の値は『漢書』「律暦志」のそれと一致した。次いで同書中に記述された蜂蜜と豚脂の密度について実測と計算値の比較を行い、『本草経集注』「序録」と『漢書』「律暦志」の権衡が一致していることを明らかにした。

以上のことから、『宋板傷寒論』の1両は、約14gであったことを強く示唆した。

【文献】日東医誌、65(1):38-45, 2014; 65(2):61-72, 2014

## 関西支部だより

# 日本薬史学会2015年会(奈良)案内と開催準備報告

日本薬史学会関西支部 事務局長 宮崎 啓一

2015年1月31日(土)、17:00より割烹 白鷺(しらすぎ)(大阪市淀川区十三東)において、関西支部の役員間で日本薬史学会2015年会(奈良)の開催に向けた会合をもちました。

本年会の会期は本年11月21日(土)です。また、年会開催地は、大陸からの文化、文物、医療および薬物が本邦に流入したシルクロード東端の終着駅といわれる平城京跡に位置する奈良です。

会場の奈良県新公会堂は、近鉄奈良駅より西に徒歩20分のところにあり、すぐ手前右側の毎年秋の「正倉院展」会場で知られる「奈良国立博物館」と左側の天平文化の象徴である「東大寺」を越えた先にあります。会場の先には鹿が群れをなす「奈良公園」、中臣氏(後の藤原氏)の氏神を祀る「春日大社」、百人一首の阿部仲麻呂の作品『天の原 ふりさけみれば春日なる 三笠の山にいでし月かも』で知られる「若草山(三笠山)」があります。

当会場1階の能楽ホールは最大500名の参加者を収容することができ、口頭発表のスペースとして使用し、2階のレセプションホールを懇親会場に予定しています。

なお、口頭発表スペースの能楽ホール能舞台は、能舞台の形式がほぼ確立された室町時代の様式が再現されたものですが、舞台の目付柱を取り外すことで、国際会議や学術会議等のステージに転換して多目的利用ができるようになっています。

本年会では、一般講演のほか、1.「奈良県地場の製薬産業の歴史について(仮題)」および2.国際シンポジウムを企画しています。

今回、年会開催準備に向けた会合では主に1.および2.の内容が俎上にのりました。

1.「奈良県地場の製薬産業の歴史について(仮題)」は本年会開催にご理解とご協力をいただいた奈良県製薬協同組合関係者らとの本会合事前の協議を踏ま



え、奈良における「くすり」と「歴史」をキーワードに古代→中世→近世→近現代に関し、各々1演題をご講演いただき、締めくくりとして、総合討論を予定しています。

とくに奈良という地は、近世から近現代に続いた売薬が有名で、第二次世界大戦後に売薬業が企業整備され、その結果が現代の奈良の製薬産業に繋がったといわれています。

2.の国際シンポジウムは、当学会津谷喜一郎会長のご発案で「グローバル商品としての朝鮮人参－日本・中国・朝鮮の歴史」を予定しています。

本年会では国際化をテーマのひとつとして、生薬の王とも称される朝鮮人参の国際間交易・流通・国産化・産業化にいたる歴史を概観します。江戸期の日本における国産化を目指した対馬や長崎経由の朝鮮人参の種の導入と栽培、明治期の中国の関税統計からみた輸出入と市場の実態、および朝鮮総督府による専売化と中国への輸出の経緯を日中韓各々の専門家からご講演をいただきます。

薬史ツアーは、年会開催日の翌日の11月22日(日)に予定しています。奈良には数々の名所・史跡や古刹が存在し、訪問先等詳細に関しては奈良県製薬協同組合関係者と検討しています。

関西支部の役員間の会合では2015年会の開催に

向け、奈良県地元の製薬関係者の方々のご理解とご協力を得て進めることを確認し、閉会しました。

日本薬史学会におきまして、年会の開催地を奈良とするのは初めての試みです。また、奈良は関西発の大手製薬会社の創業者ならびに本邦の「くすり」の故郷ともいえます。本年会を通じ、「くすり」をめぐって、奈良の歴史とポテンシャルを参加者の方々に感じとっていただけたらと思います。

最後に日本薬史学会会員の皆さまへ。関西支部役員関係者一同、シルクロードの終着駅“奈良”におきまして、本年会への多くのご参加をお待ちしております。

#### 参考資料

- 1)長澤 和俊、シルクロードの終着駅 正倉院への道、講談社現代新書(1979)
- 2)長澤 和俊、シルクロード、講談社学術文庫(1993)
- 3)奈良県新公会堂 URL: <http://www.shinkokaido.jp/>
- 4)武知 京三、近代日本と大和売薬一売薬から配置家庭薬へ、税務経理協会(1995)
- 5)奈良県薬業史編さん審議会 編集、奈良県薬業史 通史編、奈良県薬業連合会(1991)

#### [Book紹介]

Harkishan Singh 著

### Witness to an Era

A5版 251頁 600 (Vallabh Prakashan) 2014刊

著者である Harkishan Singh は、パンジャブ大学薬学部の名誉教授であり、インドの現代薬学史の第一人者である。現在もトップランナーとして学会を牽引し、2008年には、『薬史学雑誌』へも総説を寄稿している。

本書は、意欲的な執筆活動を続けている著者の第18作目に当たる。普段は語られることはない彼の半生のうち、薬学にかかわる内容を、周りの要望に応え、自叙伝としてついにまとめ上げた。インド分離独立前のパンジャブ州(現パキスタン)を舞台に、極貧の生い立ちから、村で2人だけが得た小学校への進学

の生活・英米への留学、大学教員としての教育と創薬研究への情熱と成功、最大の理解者であった最愛の妻との列車旅行中の突然の別れが、著者独特の少しシニカルな表現と分かりやすい英語で淡々と綴られている。また、著者による人間に対する鋭い洞察力と優しい眼差しが随所に見られ、読者に人物像や事物を鮮明にイメージさせて止まない。インド分離独立前後の若き薬学者が、どんな逆境も切り抜け、小さなチャンスをも逃がさず、強かに壮大な計画を進めてきた逞しい姿が、読後感と



して残る。そこからは、現代インド薬学の発展の原動力がどこにあったのかを理解することができる。しかし自叙伝として読むだけにはおさまらない。北西インドの地域文化や風俗史を知ることのできる書籍として

も大変価値がある。今まで知られなかった著者の才能を新たに認識した一冊である。

(夏目葉子)

#### [Book紹介]

遠藤正治、加藤信重、寺田正孝、松田 清 著  
杏雨書屋所蔵 「宇田川榕菴植物学資料の研究」  
B5版 768頁 非売品 (武田科学振興財団)

本書は杏雨書屋に収蔵されている宇田川榕菴および弟子の伊藤圭介の著書の詳細な研究書である。榕菴(1798-1846)は江戸時代後期の医師であり蘭学者で、シーボルトとも親交があり、ヨーロッパの植物学の文献を読み解き、江戸時代の本草学から明治時代の現代植物学への筋道をつけた人物である。

本書で扱われている著書は榕菴の「苦多尼訶経」、「植学啓原」、「百綱譜」、「榕菴写生植物図譜」、それに伊藤圭介の「二十四綱解」である。「苦多尼訶経」は仏教の經典の形を借りて我が国にヨーロッパの植物学を紹介した最初の著書として知られている。「植学啓原」はヨーロッパの植物学の詳しい解説書で、植物の分類と形態が述べられている。現在使われている植物の形態学用語の多くのものがこの書で初めて使われたものである。「二十四綱解」は当時のヨーロッパで使われていたリンネの分類大綱の解説書である。「百綱譜」はシュプレングルの著書に基づいて日本の植物を分類した稿本である。

本書の著者等はこれらの著書について、榕菴らがヨーロッパのどの文献のどの部分を引用したかを原典の文章を引用して考察している。榕菴らの語学力もさることながら、ここまで調べ上げた4人の著者の語学力と探究心もすごい。

榕菴らの著書は縮小されて、全頁が収載されている。また「植学啓原」の図版、「榕菴写生植物図譜」の図版がカラーで収載されており、写実的で詳細な図を見ることができる。巻末には榕菴の年譜とともにその頃起きた事件・事柄が47頁にわたり詳しく書かれており、引用文献・参考文献も21頁を使って書かれている。今後、榕菴研究の優れた基本図書になるであろう。

本書は2014年3月に刊行された。限定600部の非売品であるが、各地の図書館、大学などに寄贈されており、そこで閲覧をすることができる。

(指田 豊)

## 2015年会事務局よりのお知らせ

奈良市で11月21日(土)開催されます日本薬史学会2015年会の一般演題の申込み要項や締切り日程など詳細は、6月発行予定の薬史学雑誌 Vol. 50(2)に同封しますのでよろしくお願ひします。

2015年会事務局 近畿大学薬学部内 森川敏生

Tel : 06-4307-4306

e-mail : yakushi 2015@phar.kindai.ac.jp

# 薬史往来 漢方で使用する生薬の変遷

富山大学和漢医薬学総合研究所 伏見 裕利

富山大学和漢医薬学総合研究所附属民族薬物研究センター民族薬物資料館では、漢方やインド医学(アーユルヴェーダ)など世界各地で行われている伝統医学で使用する生薬を28,000点余り蒐集、保存している。故難波恒雄先生が蒐集を始め、現在でも生薬の蒐集は引き継がれており、その歴史は50年以上にも及んでいる。

伝統医学では身近に存在する動物、植物、鉱物などを生薬として使用している。正しい薬効を期待するためには正しい基源の生薬を用いる必要がある。しかしながら、歴史的に見ても市場には偽品に由来する異物同名品がしばしば流通しているため、使用に際しては注意を要する。例えば漢方を代表する生薬の一つである薬用人参では、偽品として外部形態が類似するキキョウの根が流通したこともある。薬用人参の栽培は、徳川吉宗の時代に始まったとされ、当時、幕府からいただいた種のため、植物名は「御種の人参」から“オタネニンジン”とよばれている。現在日本では、福島県、長野県、島根県な

どで栽培されている。

この他にも、マメ科のウラルカンゾウの根に由来する生薬「甘草」では、40年前の市場品では直径が30mmの太い市場品も存在するが、30年前では20mmとなり、現在では、直径が10mm前後の細いものが主流となっている。

このように生薬の変遷を垣間見る事ができるが、これは数十年の間で薬用資源について需要と供給のバランスが崩れてきていることを意味している。

日本の伝統医学である漢方は、中国医学を源流として日本国内で独自の発展を遂げている。しかしながら現在、使用する生薬の約80%は、中国からの輸入品である。日本産は10%程度であり、その他、韓国、台湾、東南アジアから約10%を輸入している。したがって90%近くは海外からの輸入に依存している状況である。今後は、耕作放棄地などを有効利用した国産生薬の栽培化が進み、国産生薬の割合が高くなっていくものと思われる。

## 編集委員会からのお知らせとお願い

編集委員会では、常任理事会の決定による経費削減のため、「薬史レター」のあり方について見直中です。その方向性は、①紙媒体からEメール配信に原則切替える、②発行回数は年4回を2回程度とする、③1号のページ数は原則8ページ以内とするなどです。これで経費は30%ほどの削減が見込まれます。すでに②の年2回発行は実施していますが、メール配信は準備中です。ご意見をお聞かせ下さい。

## 日本薬史学会編集委員会

編集委員長：西川 隆

編集委員：荒木 二夫 小清水敏昌 砂金 信義 ヨング・ジュリア

## 薬史レター 第73号 2015年3月

編集人：西川 隆 発行人：津谷喜一郎

日本薬史学会 The Japanese Society for History of Pharmacy (JSHP)

〒113-0032 東京都文京区弥生2-4-16 (助学会誌刊行センター内) 日本薬史学会事務局

tel: 03-3817-5821 fax: 03-3817-5830 e-mail: yaku-shi@capj.or.jp <http://yakushi.umin.jp>